～社会に飛び立つ毛呂山の若者たち～

元号が平成に変わってからすでに20年が過ぎました。今年は、昭和の最後に生まれた人と、平成に生まれた人が成人を迎えました。

バブル経済の絶頂期に生まれ、数年後にバブルは崩壊、その後情報技術が急速に進み、彼らを取り巻く社会情勢は、この20年で大きく変化しました。激動する社会のなかに、飛び立とうとする新成人。毛呂山町を担っていく若者たちは、今、どんな未来を描いているのでしょうか。

人生の門出を祝う「成人のつどい」の様子や、若者の夢を追いました。

成人のつどい企画・運営委員インタビュー

今年の新成人は、今をどのように考え、将来に対しどう感じているのでしょうか。そこで今回、成人のつどい企画・運営委員のなかから学生として将来のために勉強を頑張っている人たちにインタビューを行いました。

※成＝成人のつどい企画・運営委員

20歳になった感想は？

成　国民年金の通知が家に届いたので、手続きをしました。でも学生のため実感がわかないです。

成　20歳といわれると、責任を感じます。大人になるにつれて責任が増していく感じがします。

これから社会に出てやってみたいことはありますか？

成　やりたいことや興味のあることがいっぱいあるので、まだ具体的に絞りきれていないです。

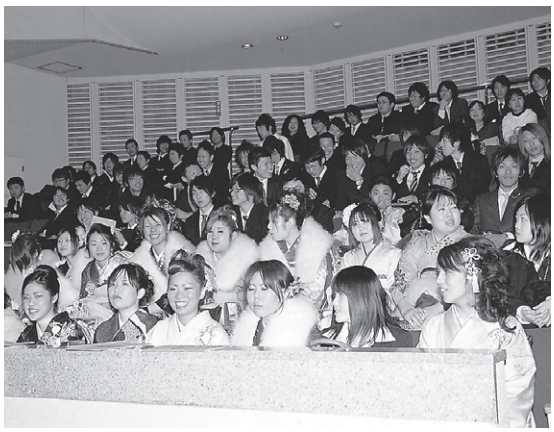
成　大学で勉強していることをきちんと身につけて、社会に出てから生かせればと思って頑張っています。

具体的な夢はありますか？

成　今、英語を勉強しています。日本は、世界で唯一の被爆国なので、

毛呂山町成人のつどい

平成21年1月11日、『第53回毛呂山町成人のつどい』が毛呂山町福祉会館で行われ、今年は279人の新成人が参加しました。会場では、中学校卒業以来5年ぶりに会う旧友と、近況を報告しあったり、晴れ着姿で写真撮影を行ったりする光景があちらこちらで見られました。



思い出写真の上映では、なつかしい写真が映し出されるたびに、笑い声や歓声があがりました。

また、各中学校の先生からお祝いの言葉が贈られ、それぞれの学校の卒業生から、感謝の手紙と花束が渡された時には、客席からは大きな拍手が沸き起こりました。

この20年間こんなことがありました！

新成人のあゆみ	主な出来事
	● 消費税3％施行（H元）
	● ベルリンの壁崩壊（H元）
	● 湾岸戦争勃発（H3）
	● バブル景気崩壊（H3）
小学校入学（H7）	● 阪神・淡路大震災（H7）
	● 地下鉄サリン事件（H7）
	● 消費税5％に（H9）
	● IT バブル（H11）
中学校入学（H13）	● さいたま市誕生（H13）
	● アメリカ同時多発テロ（H13）
	● 家庭のパソコン普及率50％を超える（H13）
	● イラク戦争開戦（H15）
高等学校入学（H16）	● 新潟中越地震（H16）
	● 愛知万博開幕（H17）
	● 岩手・宮城内陸地震（H20）

私たちの手作りです！

毛呂山町成人のつどいは平成13年から実際に式典に参加する新成人によって構成された企画・運営委員により開催されています。昨年は、新成人式研究会主催の「第8回成人式大賞2008」で毛呂山町成人のつどいが『努力賞』を受賞しました。

この企画・運営委員は、式典を自分たちで考え、企画し、当日の運営まで行います。

今年の成人のつどいは小・中学時代の思い出写真の上映や恩師からの新成人に対するお祝いの言葉など工夫された内容でした。

成人のつどい企画・運営委員の皆さん

将来は、海外に出て、そのことを世界に伝えていきたいと考えています。

成　現在、金融学を学んでいます。サブプライムローン問題などで金融に関しての不安感が高まっているので、そういうことが二度と起きないためにはどうしたらよいかを考え、起きないように努力をしていきたいです。

成　料理の勉強をしています。食の安全が問題視されているなか、相手の顔が見えるお菓子作りをしたいです。消費者と生産者のつながりのある料理の提供を目標としています。

成　将来は管理栄養士になって、できれば地元で働きたいです。

地域とのかかわりに関してどのように考えますか？

成　近所の人と仲がいいと、何かあったときに助け合うことができるので、いいことだと思います。

成　今は、携帯電話などが普及しすぎていて、携帯電話だけで話が済んでしまうことが多いですが、それって寂しいことだと思います。

成　今回、企画・運営委員に参加をして、直接人と接する、顔を合わせることは、やっぱり必要だとあらためて実感しました。

町民の命を守る
消防士

大串　大樹（だいき）　さん

毛呂山中学校卒業生。平成20年、西入間広域消防組合消防署に勤務。

子どものころから、消防士はかっこよくてあこがれでした。でも、はじめから消防士になるつもりではなく、高校を卒業した後は、大学に行くつもりでした。それが、受験に失敗してしまって。家で過ごしながら、この後どうしたらいいのかとても悩みました。来年また受験するのか、家族のことを思うと働いたほうがいいのか。

そんなとき、たまたま町の広報紙で消防士募集の記事を読んで、受験してみようと思ったんです。消防士にはずっとあこがれていましたし、地元で仕事ができるということも大きな魅力でした。私はこの町が大好きで、消防士になるのなら自分の生まれ育った町を守りたいと思ったのです。

私たちは20歳という成人の節目を迎えましたが、私にとっては、消防士になったときのほうが大きな転換期でした。それまで親に守られる立場だったのが、今度は自分が働いて、生活費をかせぐということになりましたし、お金をもらうからには、きちんとやらなくてはなりません。責任が大きく、いつも真剣です。

高校を卒業して、自分の将来が見えなかったとき、私はとても不安でした。でも、そうした迷いがあったとき、とにかく一歩踏み出してみることが大切なのだと思っています。私も、そこから全てが始まりました。

今は、半年間の消防学校を卒業して、実際に業務に携わるようになりました。周りの先輩たちは事務も訓練も的確で素早く、早く追いつきたくて、毎日必死です。

これから様ざまな現場でいろいろな経験を積み、将来は救命士になりたいと思っています。友人の父が倒れたことがあり、そうしたときにすぐ現場にかけつけて、命を救う仕事というのはすごいと思い、私もいつかそうした場面で人びとを助ける仕事をしたいと考えています。

社会で活躍する もろやまの 新成人

利用者を優しく支える
介護福祉士

野口　美紀　さん

毛呂山中学校卒業生。平成19年から熊谷市にある介護老人保健施設に勤務。

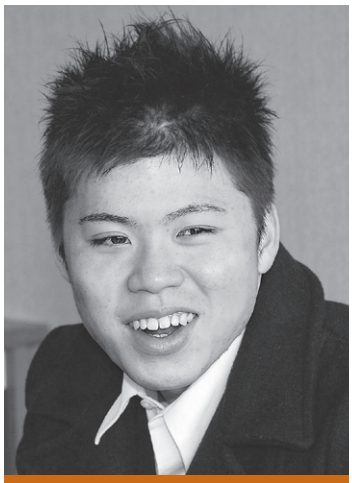
幼少のころ、入院をした経験があり、その時接してくれた看護師がとても優しく、包容力がある人でした。入院中は、毎日寂しくて、夜にこっそり、家に電話をしていました。その人は、そんな私を見かけ、お話をしてくれたり、お絵かきも一緒にしてくれました。私も将来を考えたときにそんな人になりたいと思い、人のお世話ができる職業に就きたいと考えました。そこで介護福祉の勉強ができる高校に進学しました。

私は、高校を卒業してからすぐに就職しましたが、仕事をするということは、自立する必要性と責任感をともないます。若くても利用者から見れば、プロですから、学校の実習とは全く違います。とくに相手が人ですので、接し方が悪ければ傷つけてしまう恐れもありますし、怖いと思ったことさえありました。また、お年寄りと接するのも初めは大変でした。考え方などが違うのでどう会話をしていいか分かりませんでした。でも繰り返し話をしていくうちに相手から色いろな影響を受けるようになり、勉強もさせていただきました。一生懸命介護をして、初めて名前で呼ばれたときは、とてもうれしかったことを覚えています。

私が今、携わっている介護の仕事は、全てが大変なので楽なことはありません。でも頑張ったぶん介護の技術が向上するので、やりがいのある仕事だと思います。しかも、仕事内容は見ながら覚えることが多いので、日々先輩の技を盗むように努力しています。分からないことは聞きますが、いかに気がつくかがとても重要なことなんです。また介護は、日常の積み重ねが必要です。利用者の状態を日々確認しながら、皆で協力し、少しずつ回復へ導いていく。利用者が回復していくのを見るとよかったなと感じます。

これからは、誰にでも優しく接し、仕事も早くできる、そんな人になっていきたいと思っています。

インタビュー　- 仕事・夢 -



食べる人を幸せにする 調理師

田中　裕太　さん

川角中学校卒業生。平成19年から東京のレセプション会場に調理師として勤務。

小学校を卒業するころから、料理の道に進みたいと考えていました。初めての料理は、小学校の「総合的な学習」で作ったポテトサラダでしょうか。今、考えると、すごく簡単で、たいした出来ではなかったはずですが、そのときは「おいしくできた！」と嬉しくて、料理はおもしろいと思いました。

料理の魅力は決まりがないことです。基本的な部分はもちろんありますが、そこからどうアレンジするかは、まったくの自由。色いろなレシピや、ほかのシェフの料理を見て、こんなやり方もあるんだと驚いたり、別の食材でためしてみたらどうだろうかなどと考えるのがとても楽しいんです。実際に、僕のオリジナルの料理を職場の人に食べてもらい、「いいね」といわれて、何品かお客様にお出ししたこともあります。

今の勤務先は、結婚披露宴が行われるような大きなレセプション会場のため、他ではできないような経験を積むことができます。仕事をはじめてから、社会人としての責任を強く意識するようになりました。そうした自覚は、今の職場でお客様や先輩から常識、言葉遣い、失礼のない接客などを学んでいくなかから芽生えたものです。

将来の夢は、25歳までに本場のイタリアで料理を学び、30代後半から40歳くらいまでの間に、自分の店を持つことです。これは、中学2年生のころから抱いていた夢です。夢はいつでも、就職してからでも見つけることができますが、夢がなければ、どんなことも続けることは難しいと思います。夢を持つことで、人生の軸ができ、行くべき方向が見えてくるのだと思います。

僕は進路を決めるとき、自分の個性を生かしたいと考え、料理こそがその道だと思いました。そのとき抱いた夢に向かって、これからも歩んでいくつもりです。

相手の心に寄り添う ホームヘルパー

中島明日香　さん

川角中学校卒業生。平成20年から坂戸市にある介護老人保健施設に勤務。

友達からの誘いで、今年度、成人のつどいの企画・運営委員をさせていただきました。実は、人前に出るのはあまり得意ではないんです。でもやるからには、思い出に残るものを作ろうと思って頑張りました。成人といっても、周りから言われるとそうかなって感じますが、実感はありません。20歳というと大人のイメージがありましたが、実際になってみるとまだまだ子どもだなって感じています。

現在、ホームヘルパーとして介護老人保健施設に勤務していますが、きっかけは、小学校のときボランティア体験で介護実習をしたことでした。そのときに初めて介護の仕事に興味をもちました。今は、利用者が、家庭での生活に復帰するためのお手伝いをしています。でも、私はまだまだ経験不足のため利用者全体の様子が見えていないんです。その点先輩は、それぞれの人にあわせたリハビリ目標をたて、その人にあった介護をしています。私も一日も早く先輩を見習って、広い視野で利用者に接することができるようになりたいと思っています。

今、利用者とは、ふるさとのこと、兄弟のこと、若いときのことなど楽しく話しています。大変なことが多い仕事ですが、人とかかわるのが好きなので、それ以上に楽しさを感じて仕事をしています。利用者から「ありがとう」といわれたときに、この仕事を選んでよかったと心から実感できるんです。

今後は、ケアマネジャーの資格を取得し、この仕事をずっと続けていきたいと考えています。利用者の気持ちや状態を的確に判断して、それぞれの人にあった介護プランを立てられるようになりたいです。そのためにも、一人ひとりの利用者と深く付き合い、多くの経験を積むことで、相手の気持ちを汲んであげられる、そんなケアマネジャーを目指し頑張ります。